

2021年8月22日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書1章1節

説教題：良い知らせ

こんな話があります—(北米の話です)。ある人が、仕事の帰り、疲れた体で車を運転していました。交差点に差し掛かった時、信号が青から黄色に変わりました。彼は「まだ行ける」と思いましたが、前の車が止まってしまいました。彼は頭に来て「まだ行けるじゃないか！なんで止まるんだ！」と前の車に向かって怒鳴り散らしました。ところが、ふと後ろを見ると、どこから来たのか警官が彼に近づいて来て、彼を逮捕してしまいました。まさか、逮捕されるとは思いませんでしたので、彼は驚きました。彼は警察署に連れて行かれて、取調べを受けました。取調べの後、しばらく1人で待っていたら、警官が彼のところに戻って来て言いました。「すみませんでした。あなたの車に貼ってあったシール—(「教会へ行こう！」というシール)—と、あなたの言動があまりにも違うので、てっきり盗難車だと思って逮捕してしまいました」。彼はクリスチャンでしたが、恥ずかしい思いをしたと思います。車のシールは、彼の信仰を告白していました。それは素晴らしいことでした。しかし、彼はその信仰告白を生きていなかった、とすることが出来るかも知れません。

さて、今日から「マルコ福音書」をご一緒に学んで行きます。今朝は1回目なので、最初に「マルコ福音書」の「イントロダクション」的な話をさせて頂いて、それから「1章1節」の内容に入ります。

### 1. イントロダクション～マルコと「マルコ福音書」～慰め

「マルコ福音書」を書いたマルコは、どういう人だったのでしょうか。「新約聖書」の中に何回か彼の名前が登場します。「…ペトロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に行った。そこには、大ぜいの人が集まって、祈っていた」(使徒12:12)。マルコの母は、自分の家を集会場として開放していました。イエス様が伝道をしておられた時からそうだったと思われます。その中でマルコは、自然に信仰に導かれて行ったのではないのでしょうか。しかしマルコは、その信仰生涯で何回か失敗をしています。

「マルコ14章」には、イエス様がゲッセマネの園で逮捕される場面が記されていますが、その場面に突然、前後の文脈から浮き上がって、こういう一文が出て来ます。「ある青年が、素はだに亜麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕らえようとした。すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかで逃げた」(マルコ14:51～52)。多くの学者が「これはマルコが自分の辛い—(恥ずかしい)—体験を『私はこういう者だったのだ』という悔い改めの思いを持ってここに挿入したのだろう」と言います。私もそう思います。そうでなければ、ここにこんな余計な文が出て来るはずがありません。彼もまたイエス様を捨てて、なりふり構わずに逃げ出したのです。しかし彼の失敗は、これだけではありません。それから15年程後、既に教会の指導者となっていた使徒パウロが第1回伝道旅行に出かける時、マルコはパウロの伝道旅行に同行します。しかし「パウロの一行は…パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネ(マルコ)は一行から離れて、エルサレムに帰った」(使徒13:13)。何かの事情でマルコは、1人でさっさとエルサレムに帰ってしまったのです。このことが、パウロが2回目の伝道旅行に出かける時、大問題になります。「バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡っ

で行った」(使徒 15:37~39)。優しいバルナバは、マルコの失敗にも拘らず—(失敗の故に)—もう1度一緒に連れて行こうとしました。しかし厳しいパウロは「あんな奴はダメだ」と断固反対しました。結局、マルコのために、良き同労者であったパウロとバルナバが袂を分かつことになってしまうのです。マルコはどんなに心を痛め、また自分を情けなく思ったことでしょうか。しかし、後にパウロがローマの獄中から書いた手紙には「私といっしょに囚人となっているアリスタルコが、あなたがたによろしくと言っています。バルナバのいとこであるマルコも同じです…」(コロサイ 4:10)とあります。マルコは獄中のパウロと共にいて、彼を助けているのです。さらにパウロの最晩年、パウロは再び捕らえられてローマの獄中にいました。そこから弟子のテモテに宛ててこう書き送っています。「マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです」(2 テモテ 4:11)。「マルコの助けが必要なのだ」とパウロが書いたのです。

マルコはまた、ペテロをも助けているのです。ペテロは書いています。「バビロンにいる…私の子マルコもよろしくと言っています」(1 ペテロ 5:13)。「バビロン」というのはローマのことです。迫害の中にいる信者を必死になって励ましていたペテロ、マルコはそのペテロと一緒にいて、彼を助けていたのです。パピアスという初代教会の指導者が、次の文章を書き残しています。「ペテロの通訳となったマルコは、主イエスが語ったり行ったりしたことに関して、覚えている限り正確に書いた…ペテロの弟子になったからである…ペテロはその時の必要に応じて教えをなしたが…マルコは自分が聞いたことを何一つ漏らさないことと、何一つ誤った記述をしないようにという、ただ一つの目的だけを考えていたからである」。マルコはペテロの通訳を務め、ペテロがアラム語—(弟子達の母国語はアラム語)—で話すのを、ギリシャ語に訳したのでしょう。時にはペテロの話を解説し、人々の求めに応じてペテロの話を書き留めたようです。それがやがて「マルコ福音書」となっていくのです。

生前のイエス様を知り、また「パウロとペテロ」という2人の大指導者に仕えた彼は、ペテロから聞いた「イエス様の物語」をベースにして、そこにパウロから聞いた「福音とは何か」を加味して「福音書」を書いたのです。その意味で「マルコ福音書」は、「イエス様の息づかいに最も近い『福音書』」だと言われるし、それだからこそ、やがて「マルコ福音書」が土台となって「マタイ福音書」や「ルカ福音書」も生まれて来るのです。

この「イントロダクション」に敢えてテーマをつけるなら、それは「慰め」だと思います。マルコの生涯には、記されているだけではない、様々な失敗があったらうと思います。しかしその失敗の中で、彼は少しずつ砕かれ、練られ、取り扱われ、変えられて行ったのです。ですから、ある人は「マルコ福音書は『失敗者を励ます福音書だ』」と言いました。私達も多くの失敗をします。ヤコブ書には「私たちはみな、多くの点で失敗をするものです」(ヤコブ 3:2)とあります。皆様は、いかがでしょうか。確かに私達は、失敗の中で自責の念にかられます。過去に苦しみます。しかしマルコは、失敗によって変えられたのです。失敗を通して少しずつ「主に用いられる器」になって行ったのです。「ローマ書」に、良くご紹介する御言葉があります。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 5:28)。ある有名な説教者は「この『すべて』の中には、あなたの失敗も含まれている」と言いました。キリスト者の慰めは、私達が自分で「変わりたい」と思う以上に、神様が「私達を変えたい」と思っていて下さることです。だから神は、失敗さえも用いて私達を取り扱って、永遠の観点から「益」として下さるのです。後になって私達が、その辛い出来事を、神の恵みを感じながら振り返ることが出来るようにして下さるのです。そのことに慰めを得ながら、失敗の多い信仰生活を、希望

を持って歩いて行きましょう。

## 2. 「マルコ福音書」の表題～「イエスの物語こそが福音」～チャレンジ

内容に入ります。今朝は1章1節だけです。1章1節は、恐らく「マルコ福音書」全体の表題です。マルコは自分がこれから書く書物の表題として「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」と書いたのです。この短い言葉の中には、実はマルコの思い入れがあるのです。

「マルコ福音書」は、ローマ帝国の首都ローマで書かれたと言われます。ローマ帝国においては、例えばローマ帝政の基礎を築いたシーザー(カエサル)は「神の如き人」と呼ばれました。そしてそれを継いだアウグストゥス(クリスマス物語で有名)は、「神の子」と呼ばれ、自らも「神」と自称しました。自称しただけではありません。代々の権力者は、自分が治めている民に「私を神として拝みなさい」と強要したのです。ローマ世界にあって、「神」とは、「神の子」とは、ローマ皇帝のことだったのです。しかしマルコは、「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」と書きました。そう書くことによって、「ローマ皇帝よ。真の『神の子』はあなたではない」と言ったのです。それだけで迫害の可能性を十分に持つ言葉です。

また「福音」という言葉もそうです。「福音」、ギリシャ語で「ユーアングリオン」と言いますが、意味は「良い知らせ」です。元々は「皇帝に王子が生まれた時、国民にそれを『喜びの知らせ』として告げ知らせ、国民に喜ぶことを強制した」、それが「福音(ユーアングリオン)」と呼ばれたのです。そのような社会の中でマルコが「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」と書いた時、それは「皇帝よ。あなたが王であることが私達にとっての喜びではない。あなたに王子が生まれたことが私達にとっての良き知らせではない。私達の本当の良き知らせは、イエス・キリストの中にあるのだ」と言ったのです。つまり「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」、この一言は「マルコの命がけの信仰告白であった」と言っても良い言葉なのです。

私達は、マルコの時代のような戦いの中にも、戦前の日本のキリスト者が味わった恐怖の中にもいません。しかし、だからと言って、私達がもし、自分が告白するイエス様への信仰を、実生活で生きていないとしたら、それは主に喜ばれることではないと思います。「信仰の告白を生きる」と言っても、特別のことではありません。礼拝を中心において一週の生活を造り上げることです。聖書を読むことです。祈ることです。御言葉に従うことです。それらを通して、イエス様と生きて行くことです。それは、何か義務を負わせられるようなことではありません。マルコはどうしてイエス様の物語に「福音(喜びの知らせ)」というタイトルをつけたのでしょうか。

「ビリー・キム」という人の話を聞いたことがあります。朝鮮戦争で戦災孤児となってしまった1人の少年がいました。靴磨きをして生きていた彼は、1人のクリスチャンの米兵と親しくなり、ついにはその米兵によって引き取られ、アメリカで育てられました。米兵は独身を通してその韓国人の少年を育てたそうです。やがて彼は、大学を卒業し、神学校を卒業し、宣教師になって韓国に帰りました。そして長年、韓国で素晴らしい働きをしている、それが「ビリー・キム」先生です。FEBCというキリスト教放送があります。ビリー・キム先生は、そのFEBCのためにも良い働きをしておられると聞きました。彼はいつも言うそうです。「皆さん、イエス・キリストは私達の人生を変えて下さる方です」。自分の生涯を振り返って、育ててくれたクリスチャンの米兵を思って、様々な形で、様々な人を通して自分に関わって下さったイエス・キリストに感謝を込めて、喜びを込めて、そう言われるのでしょうか。

「世の光」救霊祈祷会でこの教会に来られた姉妹が言われました。その方のお嬢さんが不登校にな

りました。当時、彼女が信仰していた宗教の上の人からは「これはあなたの娘さんの運命だから治らない」と言われました。そんな時、ある方に紹介されてキリスト教会に行くようになります。「そこから運命が変えられた」と言われました。「娘の運命も変えられた。家族の運命も変えられた。キリスト教に出会っていなければ、今頃、娘はどうなっていたのか、家族はどうなっていたのか。それを思うと、神様に感謝をしている。本当に神は運命さえも変えることがお出来になる素晴らしい方です」。

マルコも言いたかったのです。「イエス・キリストによって『私の物語』が変えられた。イエス・キリストの物語は私の救いに繋がる物語なのだ」。彼はイエスによって自分の人生が変えられたことを喜んで、その祝福の源であるイエス・キリストの物語に「福音」と名づけたのだと思います。

「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」。その「良き知らせ」は、今に続いています。イエス様の御言葉に、御生涯に、私達がしっかり寄り添って歩く時に、私達の人生が変えられます。イエス様の物語に触れ、イエス様と生きることが、私達の喜びになるのです。

私はここ数か月、自分の信仰の弱さを見せられる経験をしました。イエス様を信じるとはどういうことか、信仰を生きるとは、信仰の告白を生きるとは、どういうことか、改めて学びたいと強く願っています。これから「マルコ福音書」の学びを通して、主と共に生きて行く、その在り方を学んで行きましょう。